

第6学年 国語科の実践

1. 単元名 自分の考えを明確に伝えよう～「平和」について考える <資料>平和のとりでを築く～
2. 単元目標

ねらい

- ・資料を読みとったり、互いに話し合ったりし、「平和」について自分の考えをもつことができる。
- ・自分の意見が説得力を持つように、具体例や体験を入れたり、反論をとりいれたりして、構成を工夫することができる。
- ・話し手の意図をとらえ、自分の意見と比べながら聞き、助言や提案をすることができる。

3. ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

<聴く・話すの指導の工夫>

「聴く」については、クラスで話しあって決めた「6の1の聴く」がある。これを指標に一人ひとりが、それを意識して友だちの話をきくようにしてきた。必ずしも目を見ていなくても、自分の考えと比べたり、忘れないように書き留めたりしながら聞いていたり、資料を見ながら考えていたり、6年生なりに考えをめぐらせながら聞いている様子がかがえ、互いに意見を大切にできればよいとも考え、個に応じて指導を進め、声をかけてきた。

「話す」については、互いに声を出して授業を創ることを意識させている。マグネットを動かし、自分の立場や参加の具合が目に見えるように工夫している。声の大きさも注意しあうが、無理して強要せず、誰かが同じことを繰り返してあげる方法で互いをカバーし合うよう指導している。

<ひびき合うための指導の工夫>

ひびき合いについて、種（アイディア・意見）→芽（考えをもつ）→花（考えを変容させる・確かなものにする）の順ですすめ、互いに考えを広げたり、深めたりするものであるとし、いろいろな単元で経験を重ねてきている。（形式的に当てはまらない場合も多くあるが）その中でも聴いた意見を確かめたり、「分からない」と疑問を投げかけたり、反論したりすることには非常に慎重で、理解していないまま進むこともある。「分からない」「でも…」という姿勢を大切にし、時には励まししながら、高め合えるよう指導をしてきた。

4. 単元と指導

①単元について	②指導について
<p>平和について子どもが自分から自然に考えることは、日常生活の中ではあまりない。何か重大なことが起これば別であるが、何かのきっかけがなければ考えを深めることはまずないだろう。考えたことのないことに対し考えるということは、全員が同じ位置からのスタートであり、みんなわからないからこそ、話し合い、みんなで考えていく価値のあるものだと考える。子どもそれぞれにとらえる平和が異なるが、そこも含め互いに論じ合うことで12歳なりの平和観ができてくるだろう。平和について考えるチャンスは今回だけではなく、社会科の歴史や公民の中で考えることがある。その都度、自分の平和観を発展・進化していく。今回はその一番初めの部分であり、今後も平和観は変化していくものとして扱う。</p> <p>自分の考えをもつことについても、困難が予想される。「平和のために自分たちは何ができるのか」という答えは早々にでない。そこで、資料として提示されている「平和のとりでを築く」を扱う。この資料は、原爆ドームを通して、反戦・反核を訴えるメッセージ性の強い文章である。「平和の砦を築くための世界遺産なのだ」という言い切りの部分や題名に込めた思いを追究して初めてそのメッセージを受け取ることができる。資料は他にも必要に応じて提示するが、全員で最初の取り掛かりとして読む資料とし、読み取りに重心がいき、読む目的が失われないように扱いたい。</p> <p>自分の考えを持ち、説得力をもって述べることについては、全単元の「討論会をしよう」と共通する指導事項が多い。(1)体験や具体例を用いる (2)自分とは異なる立場の意見を取り入れる(反論を扱う)という部分である。今回もその2つを取り上げ、自分の意見をより説得力のあるものにしていく。</p>	<p>《切実な問題について》</p> <p>「平和であり続けるかどうか?」「平和にできるだろうか?」という問いかけをきっかけに、子ども達は考えを巡らせる。平和でありたいと思いつつ、「何もしなければ、現状維持もできず平和は失われていくのではないか」という考えに当然いたるだろう。子どもたちを渦巻く世の中の「平和じゃないもの」を垣間見ながら、話し合いを進めることで、見えない未来に対する不安は広がる。その話し合いを大事にすることで、「自分たちが平和のためにできること」に対し、「考えていきたいものとして、位置づく」と考える。</p> <p>資料を読んだりしながら、自分の意見を仮に作ったときには、「自分が思っていることは本当にこれでよいだろうか?」という思いが高まるだろう。自分の意見に対する「それはちがうよ」という批判を恐れながらも、それを絶対とするには自信がないだろう。単純に自分だけでは判断できない問題だからこそ、「友だちはどんなことを考えているのだろうか?」という思いを持って交流をする。多様な考えや立場に出会いながら、自分の考えを変えたり、確かなものにしたる場面として、切実さがあると考え。</p> <p>《ひびき合いについて》</p> <p>全単元に引き続き、本単元でも導入時より、子ども達自身で、話し合いを進める。みんなで、話そうという雰囲気をつくることで、つぶやきや問いなども言いやすいと考えたからである。考えを持っていても表現力に差があるので、互いに「～さんはどう思う?」と声をかけたり、必要に応じて教師が意図指名したりすることで、ひびき合いがより良いものになっていくようにしたい。</p> <p>子どもによっては、「自分の考える平和はこれでいいか?」「意見がまだできていないから、参考にしたい」「自分の意見はこれでよいが、反論があるとすればなにか?」など交流の目的が様々であると予想される。交流がしやすいように、少人数でグループを組み、話し手の意図を組みながら、助言・提案してできるようにする。</p>

6年国語 自分の考えを明確に伝えよう ～「平和」について考える <資料>平和のとりでを築く～
単元のねらい 全14時間 本時8時間目

- 資料から「平和のためにどんなことができるか」を読み取り、自分の考えをもつ。
- 平和について考えを深めるために、友だちと話し合ったり調べたりして、自分の考えを分かりやすく書くことができる。
- 効果的な話し方を考え、伝えあうことができる。

前単元「討論会をしよう」より

今、日本は平和だろうか？①

- 平和だと思う。戦争もないし。
- 平和だよ。食べたり、寝たり、幸せに暮らしているから。
- 他の国に比べたらずっと平和だと思う。
- 日本は平和だけど…平和はつづかないと思う。

- 平和じゃないと思う。福島は、まだお潜水が出ている。
- 殺人事件や窃盗事件が毎日起きているから平和じゃない。
- 事件にならなくても、けんかやいじめもあると思う。

このままずっと平和でありつづけることができるだろうか？

- わからないな
- 日本は戦争しない国だから、大丈夫。
- 平和じゃないことは絶対おこる。
- 今日本も戦争に巻き込まれるかも。
- 平和じゃないことがおきて、協力すれば平和にしていける。
- みんなが幸せに暮らせるような、国にしていける。
- 何をしたらいいかわからないけど、頑張らないとずっと平和ではいられないと思う。

日本を平和にすることができるだろうか？

- 犯罪を全くなしにするのはむりだ。
- 災害も自然のものだからなくならなね。
- 犯罪をへらしたり、災害から逃れたりすることはできる。
- けんかもいじめもなくならないと思うけど、深刻にならないうちに助けられると思う。

本当にそれってできる？②

政治家 大人 国民 自分たち 普通の人ではできない

- 戦争を起こさないようにするなんて自分じゃできない。無理。
- 人によってできることがちがう。
- 平和のためにがんばるとか、大人はやってきたのかな。
- 小さいことだったら、自分達にもできることある。
- みんなが幸せになるためにできることってなに？
- 自分たちもやれたらいいけど、何ができるかわからない。

自分が平和のためにできることってなんだろう？

むずかしいな。

たしか、国語に「平和のとりでを築く」という文章あったよ。あれって、できることが書いてある？ どんな考えなんだろう？

平和について意見を述べた文章を読んでみよう③

- 教科書の「平和のとりでを築く」の作者はどんな意見かな？

- 作者の考えっておわりにあるんじゃないかな？
- まず3つに分けない？
- 「初め」「中」「おわり」だ。
- 「初め」と「おわり」から話し合おう。

作者の伝えたいことはなんだろう？

- 終わりの二つの段落から考えるんだね。
- 「平和のとりで」って何。
- 「戦争は人の心の中で生まれるもの」の意味が分かりにくいな

人のどんな心から戦争はうまれてくるのだろう？④

- 書いてないね…考えないとわからないんだ
- 人の痛みを理解しない心
- 武力で解決しようとする心
- 相手の憎む心
- 庶民の幸せを考えない心
- 国の利益を優先する心

とりでの意味

「平和のとりでを築く」ってどういうことだろう？⑤

- 戦争を引き起こす心に歯止めをかけるってことかな。
- 武力で解決する心をおさえる壁を作ろうってことだと思う。

「平和のために自分たちができること」について作者が伝えたいことは？⑤

- 原爆ドームは平和を守ろうという心を築く世界遺産だと伝えたいと思う。
- 自分たちができることについては、結局書いてないのかな？
- うーん。でも、題名が「平和のとりでを築く」だから、「平和のとりでを築こうかな？」
- 世界遺産を守り、悲劇が起こらないようにする心をもつということだと思う。

題名の扱い

- 作者の主張をもとに、自分はどうかを考えていく。
- 最初の自分なりの「平和」についての捉えを出発点に、考えを整理し、ここでは簡単な仮の主張を作る。
- 意見を述べるのに効果的な内容や構成をおさえる
- P94.95及び討論会での学習から「反論の扱い」「具体例」「体験」をいれ、自分の考えを確かなものにしていく見直しを持つ。

自分の考えをつくろう～自分たちが平和のためにできること～⑥⑦⑧

じっくり自分の考えを作ろう⑥

- 別の資料も読んでみようかな。
- 94にもあるよ
- 私は今の日本は平和だと思います。安心して暮らせる国だからです。この平和を守るためにできることは、さらに戦争の悲惨さを訴えていくことだと考えます。
- 僕は今の日本は平和でないと思います。犯罪や殺人などの事件がない日はないからです。少しでも平和にするために、一人ひとりが思いやりをもって人と接することが大切だと思います。

友だちの考えを聞き合い、自分の考えを見直そう⑦(本時)

- そういう考えもあるんだ
- 取り入れてみよう
- そういう反論があったら、どんなふうに説得できるかな？

- 反論聞いていたら、違う考えの方がよくなっちゃった。
- 反論がきたけど、打ち勝って説得したいけど、思

「平和のために私たちができること」について考えを文章にまとめよう⑨⑩⑪

- 主張に必要な情報を集めよう。
- どんな順番でかくと良いかな？
- 説得力のある文にするには調べる必要がある。

文章の構成について、キーワードをもとに整理していく。

6-1文化祭で「平和のために私たちができること」を伝えよう⑫⑬⑭

- 互いの文を読みあって、考えが伝わるのかを聞き合おう。
- 読み方や資料の提示の仕方を工夫してみよう。

声の出し方 姿勢 視線 速さ

6. 本時について(別紙参照)



4. 本時について
 (1) 本時目標 友だちと話し合い、叙述や題名から作者の平和に対する思いを読み取ることができる。
 (2) 本時展開

学習活動	指導上の留意点
<p style="text-align: center;"> </p> <p>★ 自分なりにまとめてみよう</p> <p>★ 作者の考えを読み取ろう</p> <p>(13)・(14) 段落からまとめて</p> <p>* 原爆ドームは、核兵器は必要だと訴える記念碑であり、人の心に戦争をしないという心を築く世界遺産だ。</p> <p>* 原爆ドームは、核兵器をつくったり、戦争をおこそうとしたりする心を防ぐ壁を人の心の中に作る世界遺産だ。</p> <p>世界の遺産なのだ</p> <p>題名『平和のとりでを築く』</p> <p>世界の遺産なのだ</p> <p>* 原爆ドームを見て、核兵器は必要だと感じ、戦争をする気持ちを抑えたりでき、心の中に築いていこう。</p> <p>* 世界の遺産である原爆ドームを大切に、心の中に、いつも戦争は二度としないという気持ちをもち続けよう。</p> <p>* 原爆ドームをみながら、一人ひとりの心に、戦争を引き起こす心をおさえるとりでを築いていこう。</p>	<p>・あらかじめ書いておいた、各自の考えを配布する。似た考えや自分がよいと思う考えを伝えあう。</p> <p>・「文中の言葉を使っているもの」「12と13」がうまくまとまっているなど、何をもちよいかという視点が、叙述に基づいているよさに視点があたるように助言していく。</p> <p>・「世界遺産だ」という考え方と、「築いていこう」という考え方のズレ(ちがいに)気づけるように、分かりやすい板書していく。また、子どもたち自身のカで気づけない時には、立ち止まって考えさせていく。</p> <p>・「世界の遺産だ」という考えは、決して間違えてはいない。しかし、作者の平和への思いが表れている部分を強調して受け取ることで、題名とのつながりを意識し、自分たちが本文を読んできた目的を到達することにつながることに気づいていけるようになる。</p> <p>＜そのために大切にしたい言葉＞</p> <p>① 「世界遺産」ではなく「世界の遺産」</p> <p>② 「世界の遺産だ」ではなく「世界の遺産なのだ」</p> <p>③ 「題名＝平和のとりでを築く」</p> <p>★ 友達の見聞を聞いたり、叙述を読み返したりして、作者の平和に対する思いを読み取ろうとしている(意)</p> <p>★ 話し合ったことをもとに、自分なりに、作者の考えをまとめることができる。(談)</p>

7. 実践を終えて

(1) 本時に至るまでの経過

「日本は平和だろうか？」を投げかけたとき、子どもたちは自分の持っている知識や情報をフル活用させて「平和である」「平和でない」と語り始めた。それぞれに思うことを話し始め、話を進めるのも子どもたちから司会をたてようという声があがり、自主的に話し合いを進めることになった。友達と意見が違うことに驚いたり、その理由となる部分で納得がいけないものもあったり、この話題は難しいかと思っただが、身近なことを振り返りながら誰もが語れる話題であった。そのうち、それぞれに考えている「平和」が違っていることに気づき、「平和ってなにか」について考えを交流する場面も生まれた。互いに平和について自分なりの考えを持つことができるまでは、平和と自分との関係は全くなく、ただ客観的な視点で語っていた子どもたちだったが、「だれが平和にするのか？」という問いから、初めて自分は関係ないのか？関係があるのか？と平和と自分とのつながりを見つめ始めた。「自分ができることはなにもない」と言い切る子もいた一方で、「できることをしたいが、何をすればよいかわからない」という発言に、同調する意見が多く、「平和についてできることを考えたい」という思いができてきた。

この思いをもって、何を手掛かりに考えたらよいかは、「平和のとりでを築く」という教科書にある資料を提示した。その文から、「自分たちはどうすべきだと作者は述べているか？」について探ることにした。

しかし、本文には「自分たちがどうすべきか」ということが作者の考えとして、ストレートに書かれているわけではない。「世界の遺産なのだ」という強い言い切りの形、それまでの文章構成、ユネスコ憲章からの引用文、から作者の思いを読み取ることになる。読み取りに時間がかかればかかるほど、「平和についてできることは何か？」という問いとは離れ、「作者の伝えたいことは何か？」という問いを探る意識にスライドされていったことは、事実である。目的に応じた読み方が、それぞれの読書経験の差もあり、できなかったことは、大きな反省点である。本時は、自分たちの目的に応じて、作者の考えを読み取ることが、話し合いの焦点になっていった。

(2) 本時での様子

作者の伝えたいことについて「原爆ドームは～世界遺産である。」という考えと、「作者は、一人ひとりの心の中に戦争を繰り返さないと思う心を築くことが大切だ。」という考え、の大きく二つに分かれる構造で、進んだ。意欲的に参加している子が多くおり、ジェスチャーや比喻など、表現も豊かに話し合った。また、状況に応じて「近くの人と話す」など、全員が考えを交流する場面も設けながら、話し合いが進められていった。作者が、「平和のとりでを築く」という題名にしている根拠などにもふれながら、「ただ、世界遺産だという主張では、おかしいのではないか？」という発言をきっかけに、考えが変わったり、深まったりする子が多くいた。

しかし、こうした活発な話し合いが行われる一方で、浮かび上がってきた問題点や、課題が2つある。一つは、誰とも交流できずに下を向いている子が2人いたことだ。ノートを見ると、前回のものとは異なり、交流の結果を踏まえて書かれていたが、交流そのものに踏みだせないのには、普段の児童理解の甘さ、表現しあえる人間関係づくりができていなかったことにある。2つめは、「世

界の遺産」という言葉の表現に立ち止れなかったことである。子どもたちの話し合いの流れの中のどこで、まよっているうちに、話し合いが進んで行ってしまったことが今でも悔やまれる。立ち止ることができれば、「世界の遺産」ということから「原爆ドームを大切にしていけばいい」という考えに至った子どももいただろう。「作者は2段落からずっと、長い階段をのぼるように世界遺産である原爆ドームについて話をしている。」と発言した児童がいた。その時に、「どんな階段をのぼってきているのかな？」と掘り下げることによって、「世界の遺産」の意味に迫ることができたと分析している。いつでも、その可能性を見出す「感」を養っていなければならないと感じた。

(3) 単元を通しての成果と課題

<成果>

①自分たちの問題として大切に追究する姿勢

子どもが自分たちの問題としてとらえ、自分たちで話し合いを進める意欲をもてたことは、単元を通して「みんなで話し合い、考えよう」とする原動力につながった。自分たちの問題としてとらえたことで、普段は発言を遠慮している子どもからもたくさんの考えがよせられたり、意見を求めたり、響きあいに必要な雰囲気を作り上げることができた。また、「今現在、日本は平和である。」と思っている子どもから「これからの未来を担う自分たちが、何もしなければ、平和は維持できないのではないか？」と意見が述べられたとき、誰もが考えていべき問題として、必要感がでたのも事実である。先生に教えられるのではなく、自分たちで考えを生み出していく楽しさも味わえた単元となった。

②人の意見を柔軟に取り入れて考えを深めていくひびきあいの姿

この単元の中には、「平和か?」「平和に誰がするのか?」「自分たちにできることは?」など、自分の考えを持つ場面がたくさん出てくる。そのたびに、葛藤があったり、自分一人では決めかね、友達の意見や、作者の意見が必要となったりする場面が多くあった。最初は、友達と考えが異なることに驚いたり、心配になったりする様子もあったが、経験を経るにつれて、友達の考えを聞くことで広がったり、確かなものにしたりすることに慣れ、自分らしい意見ができてくる喜びを味わっていた。

<課題>

①資料としての教材文の必要性

「自分たちが平和のためにできること」について知りたいとき、本当にこの教材文が必要に迫られたものだったか?ということは、改めて考え直さねばならない点である。教材文が資料として読み取りにくいものだったり、自分思っている平和観とは異なる観点でのものだったり、一人ひとりの求めに応じたものではなかったかもしれない。そうだとすれば、資料として読むには自分が必要に応じて手に入れた資料をじっくり読みこなすほうが、よっぽど「読み取りたいもの」であったらう。個々の平和観に合わせて、適切な文章を用意し、同じ文章を読むグループで読み深めていく方法もあったらう。

②ねらいの焦点化

今回の単元目標の中の3つめである「話し手の意図をとらえ、自分の意見と比べながら聞き、助言や提案をすることができる。」というのは、到達できずに終わった。というのは、子どもたち一人ひとりが、「平和のために、自分は何ができるか?」をじっくり考え、自分なりのゴールにたどり着いた時点で、彼らの追究意欲は充分満たされており、それをまた改めて発表し合おうという思いには至らなかったからである。長期にわたって、じっくりとやってきたからこそ、いろいろな資料を読み、友達と話し合いながら深まってきたことは十分な成果である。最初から、そうした子どもの学習に対する思いを見通すことができれば、ねらいも2つに焦点化し、さらに時間的に余裕をもってできたと思う。